

時間依存インヴァージョン解析により推定された余効滑り分布

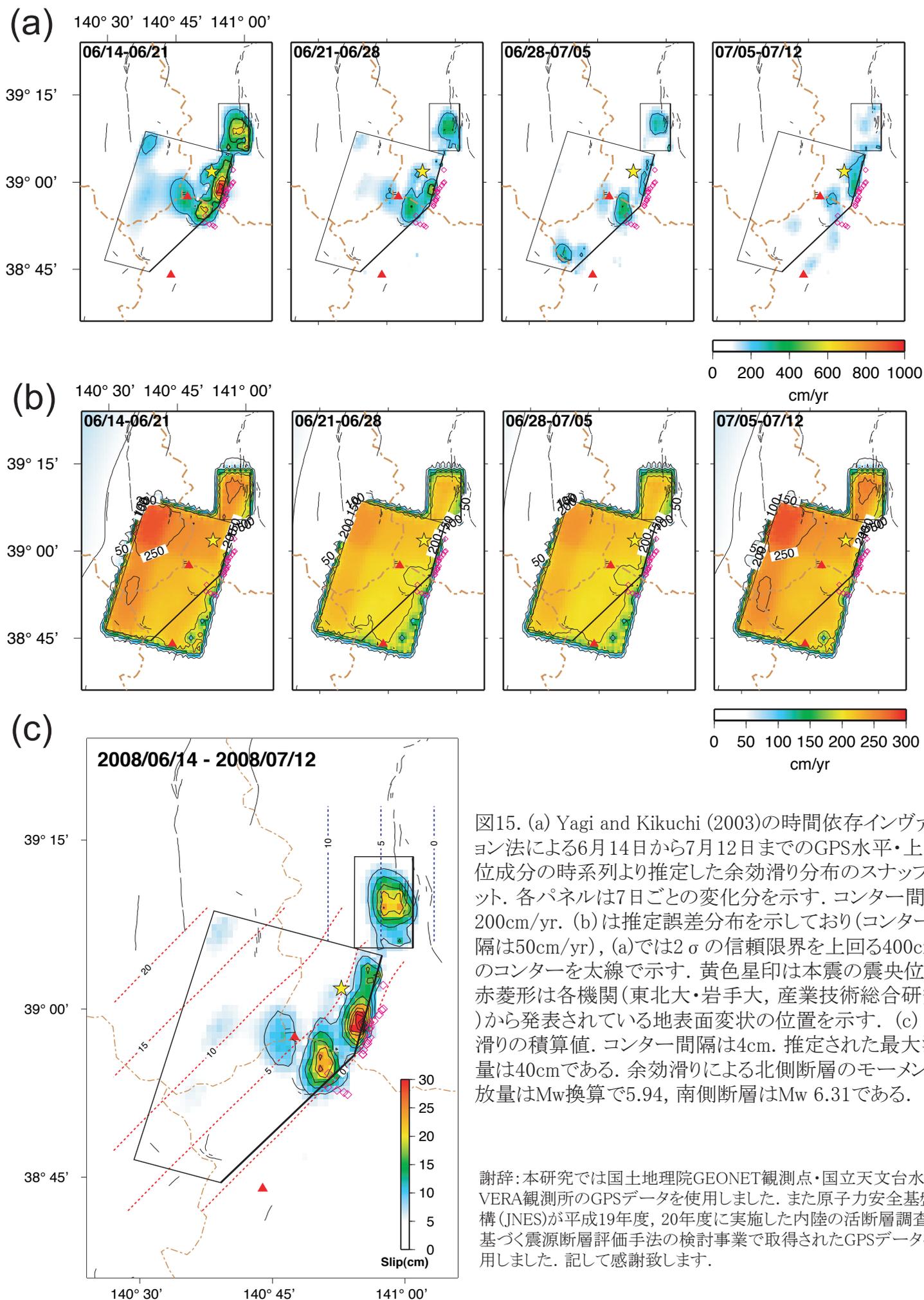


図15. (a) Yagi and Kikuchi (2003)の時間依存インヴァージョン法による6月14日から7月12日までのGPS水平・上下変位成分の時系列より推定した余効滑り分布のスナップショット. 各パネルは7日ごとの変化分を示す. コンター間隔は200cm/yr. (b)は推定誤差分布を示しており(コンター間隔は50cm/yr), (a)では 2σ の信頼限界を上回る400cm/yrのコンターを太線で示す. 黄色星印は本震の震央位置, 赤菱形は各機関(東北大・岩手大, 産業技術総合研究所)から発表されている地表面変状の位置を示す. (c) 余効滑りの積算値. コンター間隔は4cm. 推定された最大滑り量は40cmである. 余効滑りによる北側断層のモーメント解放量はMw換算で5.94, 南側断層はMw 6.31である.

謝辞: 本研究では国土地理院GEONET観測点・国立天文台水沢VERA観測所のGPSデータを使用しました. また原子力安全基盤機構(JNES)が平成19年度, 20年度に実施した内陸の活断層調査に基づく震源断層評価手法の検討事業で取得されたGPSデータを使用しました. 記して感謝致します.